

宮原遺跡

山梨県北巨摩郡久保地区県営圃場整備事業に伴う

宮原遺跡発掘調査報告書

1986

小淵沢町教育委員会

峡北土地改良事務所

宮原遺跡

山梨県北巨摩郡久保地区県営圃場整備事業に伴う

宮原遺跡発掘調査報告書

1986

小淵沢町教育委員会

峡北土地改良事務所

序 文

小淵沢町は、東に清き流れの女取川、西に溪流甲六川と緑と太陽と活力溢れる豊かな八ヶ岳南麓地帯を擁し、南に富士山、北西に甲斐駒ヶ岳を望む風光明媚な高原の町であります。

小淵沢町には、縄文時代の中原遺跡をはじめ、祖先が残した遺跡が多く存在しております。こういった先人の築いた遺産としての埋蔵文化財を保護し、後世に正しく伝えることは現在に生きる私達の使命であると痛感する次第であります。

このほど、発掘調査を行った宮原遺跡は中世の遺構である地下式土壌などが検出され、貴重な成果を上げることができ、記録にとどめることができました。本報告書が学術的な資料としてはもとより、多くの方々の文化財に対する理解と保護の一助になれば幸いです。

文末であります。発掘調査について終始指導をたまわりました、山梨県教育委員会文化課、山梨県埋蔵文化財センター、峡北土地改良事務所の関係各位、また深い理解のもとに支援をおしまれなかつた地元の方々にあらためて厚く御礼申し上げます。

小淵沢町教育委員会

教育長 宮 沢 辰 雄

例 言

1. 本書は山梨県北巨摩郡小淵沢町久保地区県営圃場整備事業に伴う、宮原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、峡北土地改良事務所との負担協定により、文化庁、山梨県より補助金を受けて、小淵沢町教育委員会が実施した。
3. 本書の作成は小淵沢町教育委員会が行なった。遺物の整理及び本書の執筆、編集は、佐野勝広が行った。
4. 出土遺物及び実測図は、小淵沢町教育委員会が保管している。
5. 発掘調査参加者
小林久子、坂井今朝子、坂井ふじ、進藤京子、進藤富子、三井ちか代
6. 発掘調査、報告書作成にあたって次の諸氏に御教示を賜った。(敬称略)
末木健、坂本美夫、新津健、武藤雄六、小林公明、樋口誠司、山路恭之助、山下孝司、平野修、櫛原功一、鈴木治彦
7. 発掘調査にあたり、峡北土地改良事務所、小淵沢町土地改良区、そして久保地区の皆様にご指導、御協力を賜ったことを感謝いたします。

目 次

序文	
例言	
I 発掘調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	2
1 遺跡の位置と地理的環境	2
2 遺跡周辺の歴史環境	2
III 遺 構	5
1 地下式土壙	5
2 土 壙	5
3 掘立柱建物址	8
IV 遺 物	9
土師質土器	9
内耳土器	10
陶磁器	12
古 銭	14
土製品	14
砥石	14
石鉢	14
石臼	14
V 結 語	17
遺構について	17
地下式土壙	17
石臼を出土する土壙について	18
遺物について	18~19
土師質土器	18~19
内耳土器	20
参考文献	21

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置及び周辺の遺跡	3
第2図	遺構配置図	4
第3図	第1号地下式土壇	6
第4図	第2号地下式土壇	7
第5図	第1号土壇	7
第6図	第2号土壇	7
第7図	第3号、4号土壇	7
第8図	第5号土壇	7
第9図	第1号、2号、3号掘立柱建物址	8
第10図	土師質土器	10
第11図	内耳土器	11
第12図	内耳土器	12
第13図	陶磁器	13
第14図	古銭、土製品	14
第15図	砥石、石鉢	15
第16図	石臼	16
第17図	県内の地下式土壇	20

写真図版目次

図版1	遺跡遠景	図版15	石臼
図版2	発掘風景	図版16	石鉢
図版3	第1、2号地下式土壇	図版17	石宮神社
図版4	第1号土壇		発掘調査参加者
図版5	第2号土壇		
図版6	第3、4、5号土壇		
図版7	掘立柱建物址		
図版8	土師質土器		
図版9	土師質土器		
図版10	土師質土器		
図版11	内耳土器		
図版12	内耳土器		
図版13	陶磁器		
図版14	陶磁器、土製品、古銭、砥石		

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

小淵沢町では、昭和56年度よりはじまった県営圃場整備事業に伴って、昭和59年度までに、3遺跡の埋蔵文化財の発掘調査が町教育委員会により実施された。昭和60年度は、小淵沢町久保字宮原の約8haの圃場整備が予定されていた。このため小淵沢町教育委員会は、予定工区内の試掘調査をトレンチ方式により実施した。その結果、中世の地下式土壌が1基確認され、中世遺構の埋没が予想された。この結果をうけて、当該遺跡の措置について、峡北土地改良事務所と町教育委員会との協議をおこなったところ、本調査を実施することになり、峡北土地改良事務所の委託をうけて、町教育委員会が主体になり、発掘調査を行なった。

発掘調査は昭和60年7月1日より開始し、報告書作成までの作業が完了したのは昭和61年3月31日であった。

調査体制は下記のとおりである。

調査主体者 小淵沢町教育委員会（教育長 宮沢辰雄）

調査組織

事務局 課長 進藤照平

係長 小林和幸

主事 清水美沙子

調査担当 佐野勝広（小淵沢町教育委員会）

調査参加者

小林久子、坂井ふじ、坂井けさ子、進藤京子、進藤富子、三井ちか代

2 調査の方法と経過

発掘調査は全体で約4,000㎡で、試掘調査により、遺構の存在が確認されており、調査は全域の表土を、遺構確認まで重機により排土し、その後、人力による鋤簾がけを行ない、遺構の検出を行なった。その結果、地下式土壌2基、土壌5基、掘立柱建物址3棟が確認された。

遺構確認後は、遺構、遺物の測量のため、10mメッシュのグリットを設定した。グリットの設定は磁北にそって設け、北から南へ1～20列、西から東へA～Y列とした。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置と地理環境

宮原遺跡は、小淵沢町久保字宮原に所在する。小淵沢町は山梨県の西北部に位置し、西は甲六川を境にして長野県と接している。隣接町村には、北東に長坂町、南に白州町がある。当町は、八ヶ岳の権現岳から続く南西傾斜面にあり、この斜面には放射状の幅谷が発達し、集落は谷の谷頭に展開している。谷頭には多くの舟形窪地がみられ、そこには久保（窪）の地名が多く残っている。宮原遺跡の所在する久保の地名もここから由来する。

2 遺跡周辺の歴史環境

先土器時代

小淵沢町内での先土器時代の遺跡の発掘調査はまだ行なわれていないが、上笹尾夏秋遺跡、や松向の杉の木平遺跡から、先土器時代の石器が発見されている。夏秋遺跡からは、先土器時代末と考えられる細石刻が発見され、杉の木平遺跡では黒曜石のナイフをつくったのではないかと考えられる剝片が発見されている。2遺跡の遺物はいずれも偶然性による発見であり、遺跡の実体まで把握するまでには至っていない。

縄文時代

中原遺跡、岩久保遺跡、沢の田遺跡等が知られている。中原遺跡は標高 920m～940mの尾根上にあり、縄文時代中期～後期の土器、特に酒醸造具と考えられている有孔鏝付土器が出土している。岩久保遺跡は中央線より南側約 1 km、幅約 500mの大集落遺跡である。縄文時代前期末から中期後半までの土器、土偶が出土している。沢の田遺跡は標高 870mほどの南面する緩傾斜に立地する。沢の田遺跡からは、縄文時代前期の十三菩提式土器をはじめ、中期の土器が出土している。

弥生時代

小淵沢町の弥生時代の遺跡は、弥生時代中期が主体であり、その遺跡は、上笹尾の雪車、源氏籠、長尾根、夏秋遺跡、下笹尾の江戸山、頭佐沢南遺跡等が知られている。小淵沢町の東に位置する旧篠尾村より弥生時代の代表的石器である磨製石鍬が発見されている。

古墳時代

小淵沢町には古墳（高塚）が発見されていない。しかし、松向の宝ヶ森遺跡から4世紀の中頃のものと思われる土器が発見されており、古墳時代前期の集落が営まれていたかもしれない。

歴史時代

小淵沢町では、奈良時代の遺跡は発見されていない。平安時代の遺跡は数多く発見されている。代表的な平安時代の遺跡として、久保の中原遺跡、宮久保の上平井出遺跡、下笹尾の前田遺跡等が知られている。中原遺跡では、甲斐型とよばれている土師器の坏や甕が出土し、上平井出遺跡からは、「富」と墨で書かれた土師器の坏や鉄製鋤先、鎌が出土している。

中世末には、下笹尾の七里岸の急崖上に笹尾塁跡が築かれ、その上棒道が整備されて、軍事的に重要な役割をはたした。

層 序

宮原遺跡の標準層序は次の通りである。

第Ⅰ層 耕作土

第Ⅱ層 床土 鉄分が集積

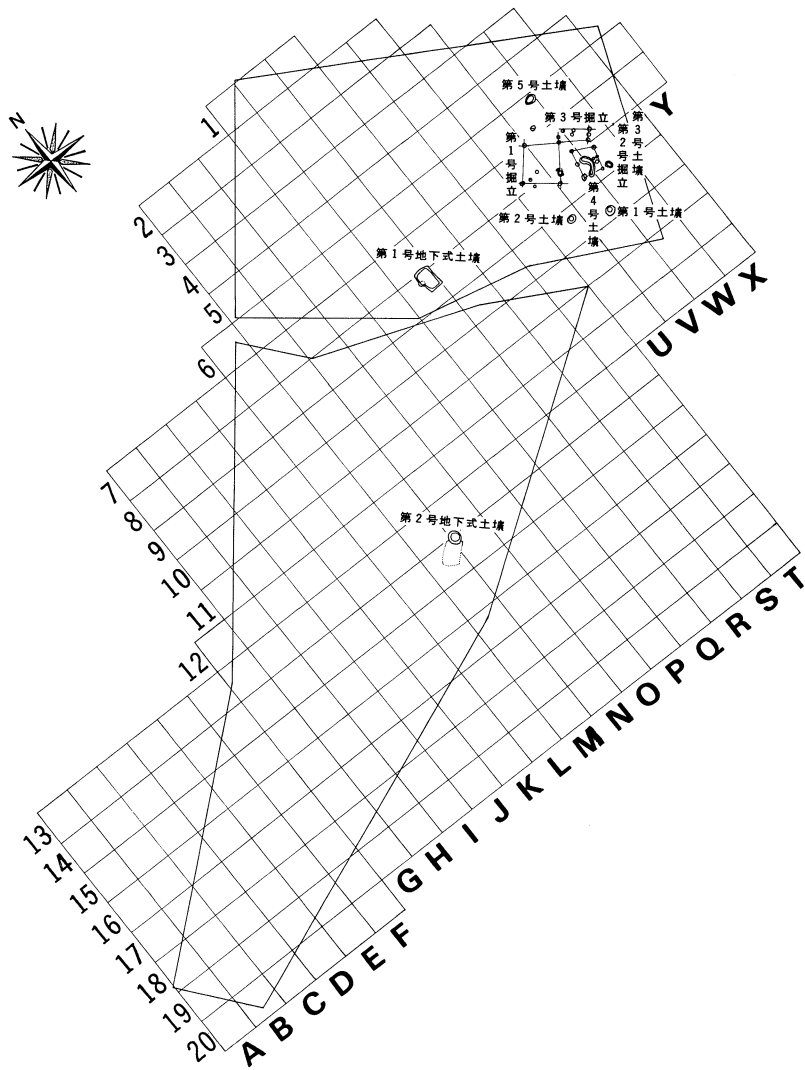
第Ⅲ層 黒褐色土

第Ⅳ層 ローム層

No.	遺跡名	時 期
1	上前後沢	縄文中、平安
2	下前後沢	縄文中、平安
3	岩 窪	縄文前、中
4	上 宮 原	縄文中
5	竹 原	縄文中、平安
6	宗 高	縄文中、後
7	中 原	縄文中
8	上 井 詰	縄文前、中、後期
9	天 神 宮	縄文中、後
10	下 久 保	平安
11	加 室	縄文前、中



第1図 遺跡の位置及び周辺の遺跡



第2図 遺跡配置図 (縮尺400分の1)

Ⅲ 遺 構

1 地下式土壙

第1号地下式土壙（第3図）

本地下式土壙は、水田の造成のさいに天井部と入口部を削平されている。入口部は西方向にある。長径 2.5m、短径 2 m の隅丸長方形を呈し、底は平坦である。埋土は、黒色土にローム混りの土が堆積していた。出土遺物は、底面直上より土師質土器、青磁の破片が出土した。

第2号地下式土壙（第4図）

本地下式土壙は、北側方向に入口部をもつ地下式土壙である。堅壙の入口部は、確認面での平面形はほぼ円形を呈し、径 1 m を測り、深さ 1.2m で幅約 50cm の段が付き、段から斜に 70cm 下って底に達する。地下室は、奥行 1.5m、幅 1.8m で、平面形は長方形を呈している。天井部の断面はカマボコ状を呈する。壁は幅約 20cm ほどの工具痕を残すが、全体としては丁寧なつくりである。埋土は、流れこみによる自然堆積であり、一部に炭化物を含んでいる。出土遺物は、埋土中より、内耳土器破片、底直上より皇宋通寶 1 点が出土した。

2 基の地下式土壙の構築時期は、出土遺物等から、中世～近世と考えたい。

2 土壙

第1号土壙（第5図）

本土壙は、調査区の南側に位置しており、平面形は不整円形を呈している。規模は、長径 1.15m、短径 1 m、深さ 35cm を測る。壁は、ゆるく立ち上がる。底は平坦でなく、中央に凹凸がみられる。土壙内には、径 20cm～40cm 位の比較的大形の角礫が入っていた。埋土は、ローム粒子を含む黒色土が堆積している。出土遺物は、底から石臼の破片と内耳土器破片、開元通寶 1 点が出土している。本土壙の構築時期は、遺物から中世末と考えられる。

第2号土壙（第6図）

本土壙は、調査区の西側に位置している。平面形は不整楕円形を呈し、その規模は長径 1 m、短径 80cm、深さ 40cm を測る。底は平坦で、壁は外傾斜しながら立ち上がるために、その断面はすり鉢形を呈する。土壙内には 5 cm～20cm の礫が検出された。出土遺物は、土師質土器破片、内耳土器破片、砥石 1 点、石鉢破片 1 点が出土している。時期は中世末～近世初頭と考える。

第3号土壙（第7図）

本土壙は、調査区の東側に位置している。平面形は長方形を呈し、規模は、長径 90cm、短径 45cm、深さ 50cm を測る。壁は垂直に立ち上がり、底は平坦である。埋土はロームブロックの混じる黒色土が堆積していた。出土遺物は、土師質土器破片、内耳土器破片、皇宋通寶 1 点が出土している。本土壙の構築時期は出土遺物から、中世末～近世と考えられる。

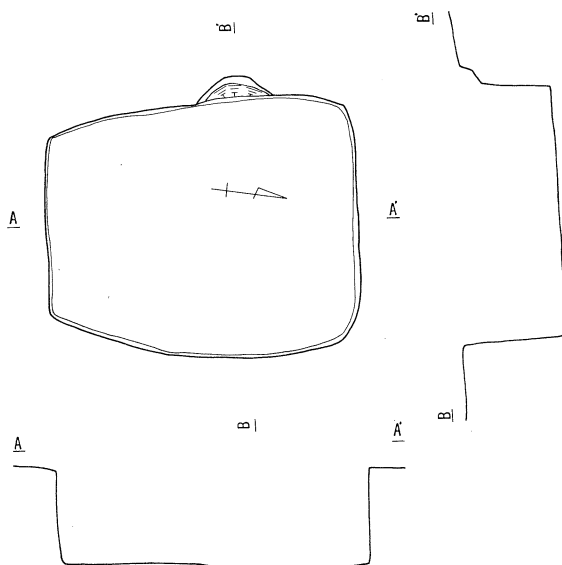
第4号土壙（第7図）

本土壙は、調査区の東側、3号土壙の東側に隣接し位置している。平面形は不整形を呈し、

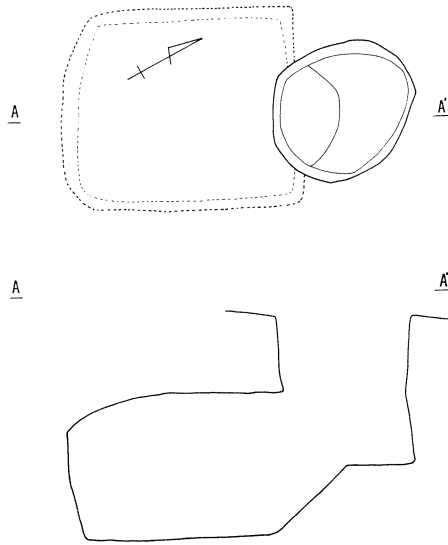
規模は長径 2.3m、短径 1 m、深さ35cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底は平坦である。埋土は黒色土が堆積し、一部に炭化物が検出された。埋土中より、土師質土器破片、円形土製品 1 点、砥石 1 点が出土している。本土壙の構築時期は遺物からして中世～近世初頭と考えられる。

第 5 号土壙 (第 8 図)

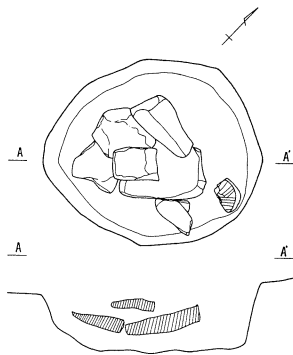
本土壙は、調査区の北側に位置している。平面形は不整円形を呈し、その規模は、長径 1.3 m、短径 1 m、深さ30cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がり、底は若干の凹凸が認められるものの、ほぼ平坦である。断面形はすり鉢状を呈している。埋土は、焼土を含む黒色土で下部に若干の炭化物が混入していた。出土遺物は、底より土師質土器破片、内耳土器破片、洪武通寶 1 点が出土している。本土壙の構築時期は、出土遺物からみて、中世末～近世初頭と思われる。



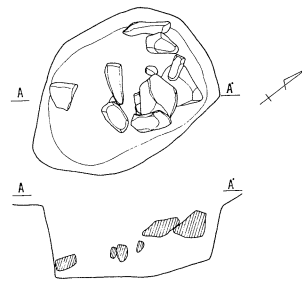
第 3 図 第 1 号地下式土壙 (縮尺60分の 1)



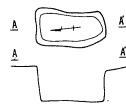
第4図 第2号地下式土壙（縮尺60分の1）



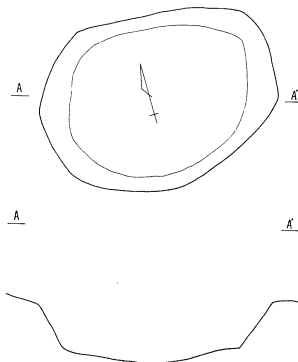
第5図 第1号土壙（縮尺40分の1）



第6図 第2号土壙（縮尺40分の1）



第7図 第3号、4号土壙（縮尺50分の1）



第8図 第5号土壙（縮尺40分の1）

3 掘立柱建物址

第1号掘立柱建物址 (第9図)

建物址の方位は、N45Wを示し、梁行1間(4m)×桁行1間(4m)のやや不整であるが、正方形に近い平面形を呈する。面積 $16m^2$ である。柱穴はほぼ円形を呈し、深さ20cm~40cmを測る。柱穴P3の東側に直径40cm~60cmの平石がみられ、礎石と考えられる。出土遺物は仏花瓶の底部が出土している。

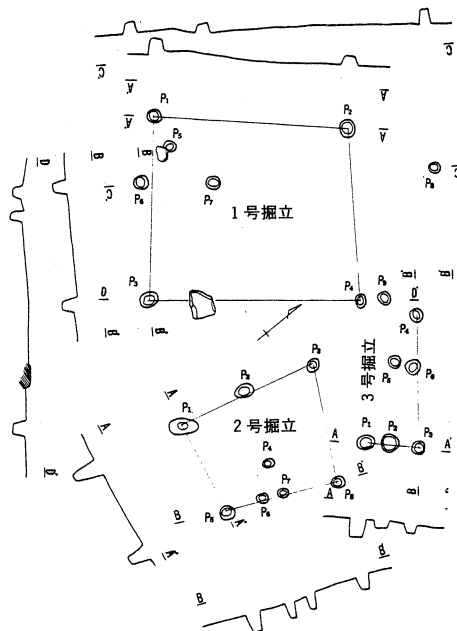
第2号掘立柱建物址 (第9図)

建物址の方位は、N108°Wを示す。平面形は、梁行1間(2.2m)×桁行(3m)の台形を呈し、面積は $66m^2$ である。柱穴の平面形は、円形を呈し、深さ30cm~60cmを測る。出土遺物は、建物址中央より内耳土器破片が出土し、他に陶磁器破片1点が出土している。

第3号掘立柱建物址 (第9図)

建物址の方位はN50°Wを示す。平面形は梁行2間(1m)×桁行2間(3m)の長方形を呈し、面積は $3m^2$ である。柱穴の平面形は円形を呈し、深さは20cm~40cmを測る。出土遺物はない。

3棟の掘立柱建物址は、遺物等から推測して、中世末~近世初頭に構築された遺構と考えられる。



第9図 第1号、2号、3号、掘立柱建物址 (縮尺160分の1)

IV 遺物

土師質土器 (第10図)

1は第1号地下土壌より出土した土師質土器である。体部は緩く外反し、口唇部がやや尖る。底部は平坦である。成形はロクロによって行なわれ、ロクロ成形時の稜を残している。底部の切り離しは、右回転の糸切りにより行なわれている。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。口径13cm、底径6.6cm、高3cmを測り、口径と底径の差は大きい。

2は第1号地下土壌より出土した土師質土器である。底部より緩やかに口縁部に至る。底部は、回転糸切り痕を残す。胎土中に小砂粒を含む。色調は淡褐色を呈する。口径12cm、底径6.2cm、高さ3cm、内面にスス付着している。

3は第1号地下式土壌出土である。口縁部が若干内彎する。底部に回転糸切り痕を残している。胎土には小砂粒を含み、焼成良好で、色調はにぶい淡褐色を呈する。口径12cm、底径(推定形)7cm、高2.4cmを測る。

4は第2号地下式土壌より出土した。口縁部は外反する。成形はロクロによってなされている。内外共に色調は、淡褐色を呈し、内面にはススが付着している。口径13cm、高さ3cm。

5は第2号地下式土壌より出土した。口縁部上半部が弱く外反している。色調は淡褐色を呈し、焼成良好である。口径12.6cm。

6は第2号地下式土壌より出土した。口唇部に丸味をもつ。色調は赤褐色を呈し、胎土は密である。口径13.4cm。

7は第1号土壌より出土。口縁部は厚く、口唇部で丸味をもつ。胎土に小砂粒を多く含む。色調は淡黄色を呈する。口径12.6cm。

8は第1号土壌出土。口縁部はやや外反気味であり、成形はロクロを使用している。色調は淡黄色を呈し、胎土中に砂粒を若干含む。口径14cm、内面にスス付着。

9は第3号土壌出土。口縁部上半部が緩く外反する。成形はロクロによってなされている。底部は平底で、切り離しは、回転糸切りによる。胎土には砂粒を含み、比較的緻密で、焼成良好である。色調は、淡黄色を呈する。口径7cm、底径4cm、高さ1.8cm。

10は第2号土壌出土。口縁部は強く外反し、口唇部が尖る。色調は、淡黄色を呈し、胎土は密である。口径14cm。

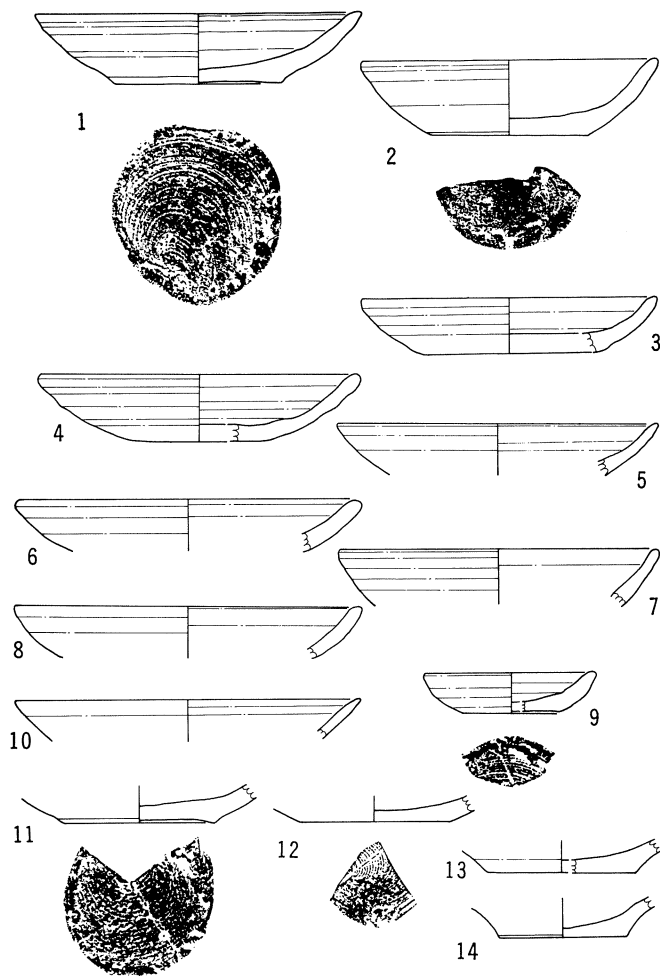
11は第3号土壌出土。底部は平底で、切り離しは、回転糸切りによる。色調は内外共に黒褐色を呈し、内面にススがコールドール状を呈して付着している。灯明具として使用されたものと考えられる。底径6cm。

12は第4号土壌出土。底部の切り離しは、回転糸切りによる。色調は内外共に淡黄色を呈し、胎土には小砂粒を多く含む。底径6cm。

13は第4号土壌出土。底部には、回転糸切り痕が残る。色調は淡黄色を呈し、胎土中には、内

外共に砂粒を含む。底径6cm。

14は第4土壙出土。色調は淡黄色を呈し、底部は回転糸切りによる切り離しを行なっている。



第10図 土師質土器（縮尺3分の1）

内耳土器（第11、12図）

1は第2号地下式土壙出土。口唇部はやや丸く、口縁部の内稜は弱い凹面を呈する。耳はない。色調は内面灰褐色、外面は黒褐色を呈している。外面にはスス附着。口径27cm。

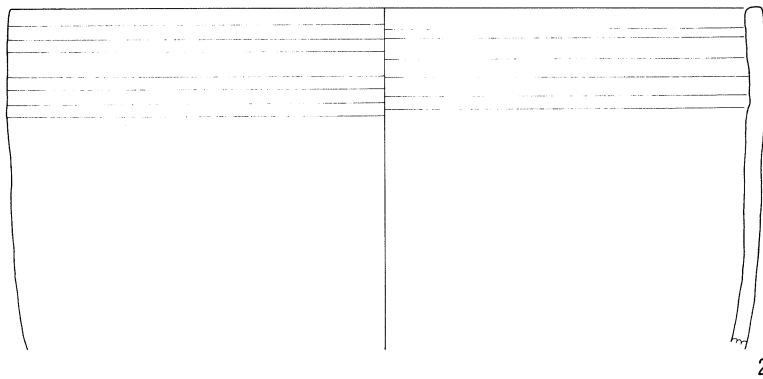
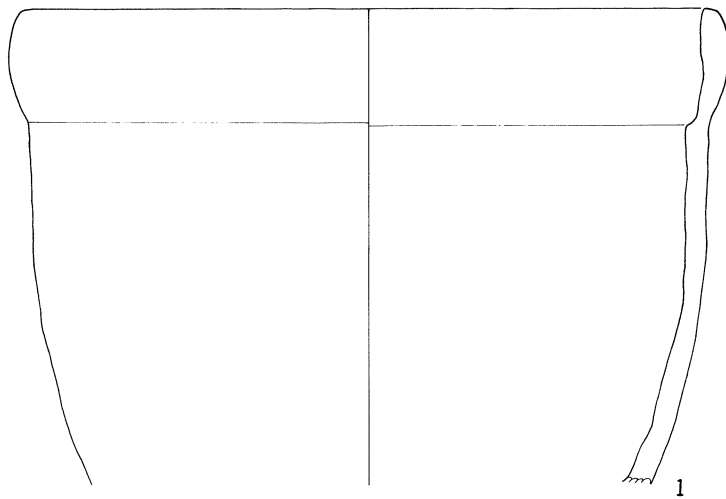
2は第1号掘立柱建物址出土。口唇部は平坦で、内稜は弱い凹を呈する。口縁部には横ナデが施されている。色調は内面赤褐色、外面褐色を呈する。輪積成形。口径30cm。

3は第2号土壙出土。耳を口唇部と同位につける。口唇部は平坦で、やや外へ開く、色調は内面黄褐色、外面黒褐色を呈し、胎土中に砂粒を多く含む。輪積成形。外面にはスス附着。口径30cm。

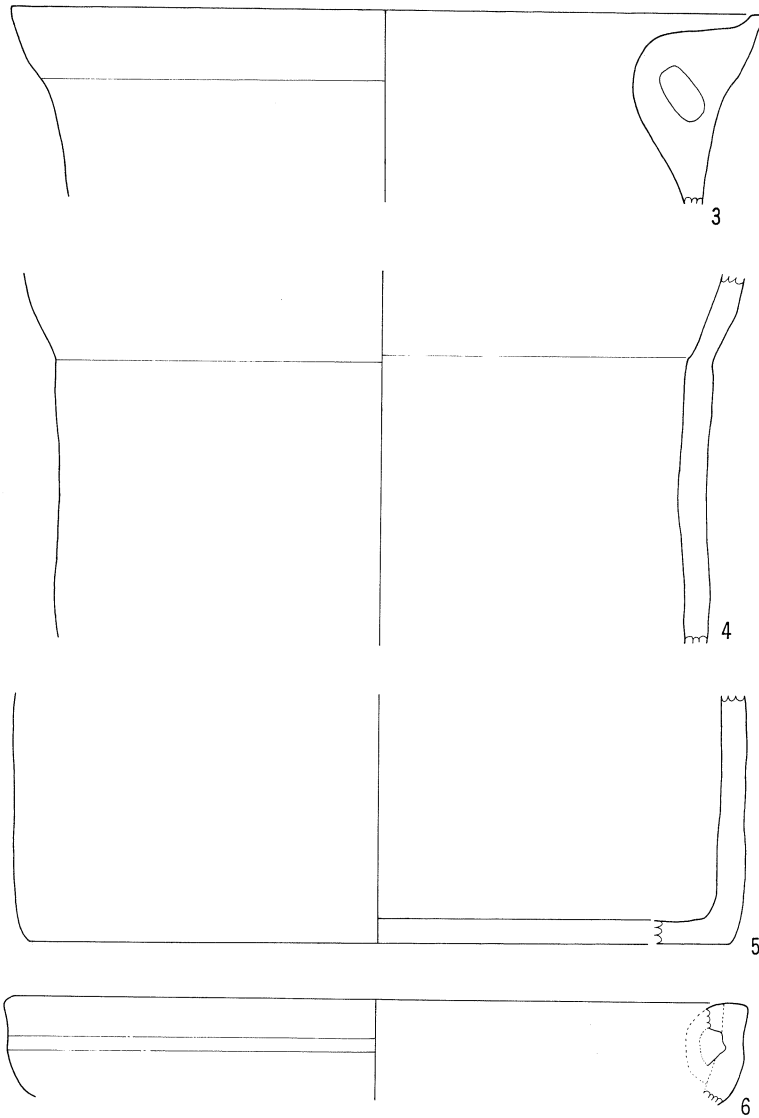
4は第3号土壙出土。器面はナデ調整を施し、色調は内面黄褐色、外面黒褐色を呈する。

5は第3号土壙出土。器面ナデ調整、胎土中に金雲母を含む。色調内面茶褐色、外面黒褐色を呈し、外面にはスス附着。

6は第5号土壙出土。ほうろくである。口唇部は平坦、器面はナデ調整を施している。色調は内黄褐色、外黒褐色。口径28cm。



第11図 内耳土器（縮尺3分の1）



第12図 内耳土器（縮尺3分の1）

陶磁器（第13図）

1、2、3共に第1号地下土壙出土の青磁である。1は青磁の鉢で、口縁部はくの字形を呈し、内面に蓮弁状の陰刻文を配している。素地は灰白色を呈し、釉は不透明な緑色を呈する。

2は蓮弁文碗の破片である。素地は灰白色で、釉は緑色を呈している。

3は青磁碗の底部である。素地は灰白色を呈し、釉はうすい緑色である。3点の青磁ともに、中国の竜泉窯の製品である。

4は第1号掘立柱建物址より出土。仏花瓶の底部であり、左巻の回転糸切痕が残る。素地は白色を呈し、釉は緑色を呈する。底径8.4cmを測る。この仏花瓶底部は愛知県瀬戸で焼かれ

たもので、15世紀に比定されている。

5～15までの陶磁器は、遺構外で出土した遺物である。5は鉄釉が内外共に施されている。底部は回転糸切痕が残る。底径7cm。

6は仏餉具で、素地は白色を呈し、灰白色の釉をかせている。底径3.4cm。

7は愛知県瀬戸で焼かれた灰釉の小皿である。素地は淡白色を呈し、口縁部内外面に淡緑色の釉が施されている。口径10cm。

8は灯明皿で、二重口縁をもつ。黄味白色の釉がかかっている。美濃の製品である。口径10cm。

9は小型の徳利で、内外面に茶褐色の釉がかかる。口径4cm。

10は高台部破片である。淡緑色の釉がかかる。

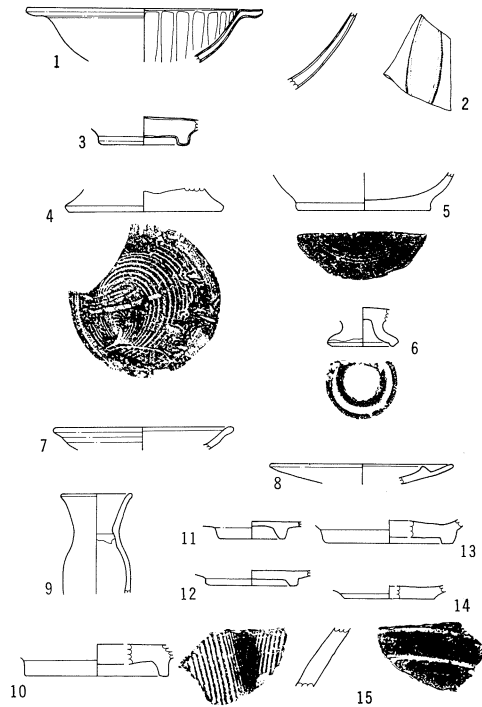
11は高台部破片で、内外に白色の釉がかかっている。

12は高台部破片である。内外面に透明な白色をかせる。

13は内面に鉄釉がかかる高台部破片である。

14は内面に淡緑色の釉がかかり、素地は白色である。底は回転糸切痕を残す。

15は播鉢の破片である。素地は赤く、多くの砂粒を含む。



第13図 陶磁器（縮尺4分の1）

古銭（第14図）

1は第1号土壙出土。唐銭で、武徳4年（621年）に鑄造された開元通寶である。字体は真書体である。

2は第2号地下式土壙出土。北宋の皇宋通寶で、宝元2年（1039年）鑄造である。

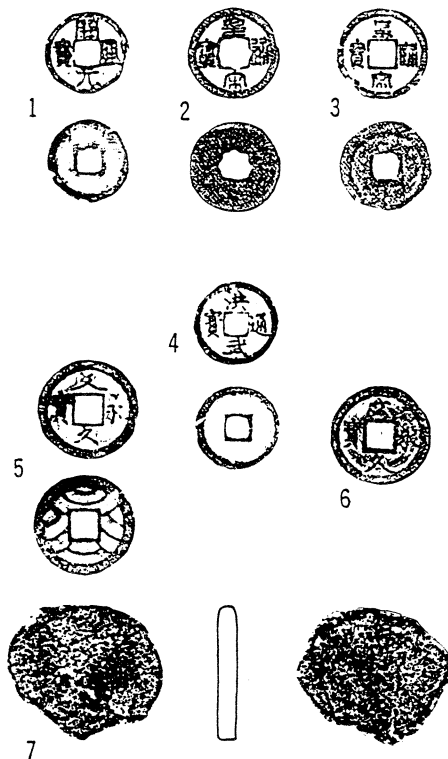
3は第3号土壙出土。皇宋通寶で2と同じく宝元2年に鑄造されたものである。2と3ともに字体は篆書である。

4は第5号土壙出土。明銭の洪武通寶で洪武元年（1368年）に鑄造された。洪武通寶は日本に多量に持ち込まれている。字体は真書体である。

5と6は表採による。日本の文久永寶で、文久3年（1863年）に鑄造されたものである。

土製品（第14図）

7は円形土製品で、内耳土器の一部を利用し、縁辺部を加工して円形に成行している。本土製品と同様な土製品を出土した遺跡は栃木県岩舟町赤塚遺跡、栃木県上三川町大町遺跡、東京都葛西城址、群馬県長楽寺遺跡等があり、その用途は、冥銭とか灯明皿の一部と考えられているが、明確ではない。



第14図 古銭、土製品（縮尺2分の1）

砥石（第15図）

1は第1号土壙出土。石質は泥岩であり、長さ6cm、厚さ1cmを測る。四面に研磨面をもつ。

2は第1号土壙出土。石質は硬砂質である。4面のうち、3面を研磨面としている。長さ4.5cm、厚さ1.5cm。

3は第2号土壙出土。石質は泥岩であり、長さ4cm、厚さ1.5cmを測る。四面をすべて研磨面としている。

4は第4号土壙出土。石質は泥岩である。長さ6cm、厚さ1.8cm、四面をすべて研磨面としている。

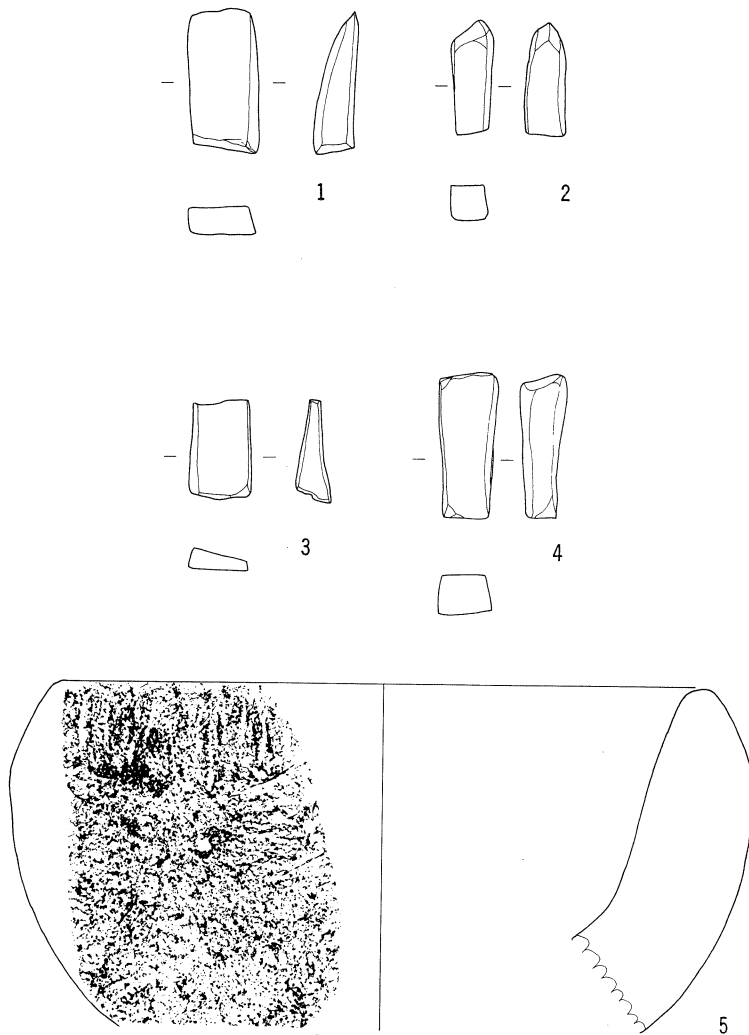
石鉢（第15図）

第2号土壙出土。石質は安山岩である。口縁部は丸味を呈し、器厚は総じて厚い。外面には、ノミ状工具によると思われる成形痕が明瞭に残る。このような石鉢は、大泉村の豆生田第3遺跡、

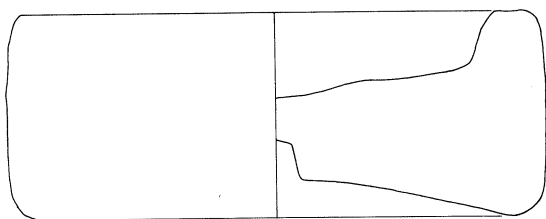
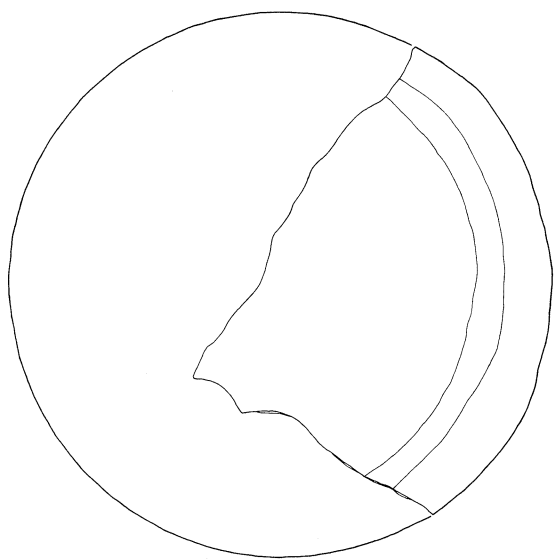
長坂町小和田遺跡、葦崎市金山遺跡等で僅かながら、その出土例が報告されている。特に、金山遺跡から完全な形で、片口をもつ石鉢が出土している。

石臼（第16図）

第1号土壙出土。穀磨臼の上臼で、石質は安山岩である。磨面は比較的磨耗している。1分面に4溝を単位とする目が認められ、全体では6分画と思われる。推定径28.6cm、縁部の厚さ10cmを測る。



第15図 砥石、石鉢（縮尺3分の1）



第16図 石臼（縮尺4分の1）

V 結 語

遺構について

地下式土壇について

地下式土壇とは、中世から近世にかけてみられる遺構の名称で、地表面下に堅壇を掘り下げてこれを入口部とし、その底面から横へ掘り広げて本体である地下室を築いたものである。名称は、地下式土壇の他に、地下式壇、地下式横穴、地下式土倉等さまざまな呼ばれている。その機能については、墓壇説、貯蔵庫説の他に隠れ穴説、僧侶の修業場説があるが明確なことはわかっていない。

山梨県内において、当遺跡を入れ、13遺跡で地下式土壇が発見されている。ここでは県内の地下式土壇を紹介し、立地、形態、構築時期、機能について若干の検討を行ないたい。

大月市吉久保遺跡

吉久保遺跡は、大月市笹子町吉久保に所在し、大鹿川によって形成された扇状地で標高 600 m上に位置する。吉久保遺跡では3基の地下式土壇が発見された。1号地下式土壇は入口幅60 cm、高さ90cmで、地下室は幅 2.6m、奥行 2.8m、高さ 2 mで、天井部はドーム型を呈している。

2号地下式土壇は、幅70cm、高さ 1 m、地下室の幅 2.7m、奥行 4.6m、高さ 2 mを測り、天井部はドーム型を呈する。底面は水平である。3号地下式土壇は、入口部直径 1 mの円形で、幅70cm、高さ 1 mの羨道が 1 m程水平にのびて地下室になる。地下室の幅 2.4m、奥行 3.4m、高さ 1.7mで地下室の平面形態は長方形を呈する。3基の地下式土壇共に出土遺物はない。

大月市原平遺跡

原平遺跡は大月市大月町真木字原平に所在し、標高 410m～ 415mの河岸段丘上に位置している。小堅穴状遺構2基、ピット群、地下式土壇1基が発見された。入口部は方形を呈し、直径約 1.8m、堅壇の深さ 1.8mで、下にいくにしたがって狭くなる。地下室は幅 3 m、奥行 2.2m、高さ 1.8mである。天井部は中央で台形を呈する。地下室の平面形はほぼ円形を呈している。出土遺物は土師質土器、石臼、古銭、炭化した布である。時期は中世と考えられている。

上野原町牧野遺跡

牧野遺跡は、北都留郡上野原町四方津 521番地に所在する。上野原町四方津地区は西から東に流れる相模川をはさみ、東西に細長く発達した小さな河岸段丘がみられ、遺跡はこの段丘の先端部に位置している。牧野遺跡から地下式土壇1基が発見された。堅壇の入口部径 1.9m、深さは現地表より約 3 mで底面になる。地下室は奥行 3 m、幅 2.5m、高さ 1.6m～ 1.8mを測り、平面形は方形を呈している。出土遺物は検出されていない。時期は不明である。

富士吉田市古屋敷A遺跡

古屋敷A遺跡は、富士吉田市大明見字古屋敷に所在する。道志山地の一峯杓子山より北西にのびる尾根、通称背戸山南麓の緩斜面に立地する。地下式土壇2基が検出されている。1号地下式土壇は、主軸をほぼ東西に持ち、堅壇の入口部は直径1.7mで円形を呈し、壇底までの深さは確認より4.8mを測る。地下室底面と堅壇底面とは60cmの段差をもっている。地下室は、奥行3.2m、幅2m、高さ2.1mを測り、平面形は隅丸方形呈する。奥壁から南壁にかけて幅50cm、高さ1mでベット状の遺構がみられる。出土遺物はない。時期は第2号地下式土壇が中世と考えられることから第1号地下式土壇も同時期のものと思われる。第2号地下式土壇は、堅壇の入口部直径1.8×2.3mの楕円形、堅壇底面と地下室底面とは約40cmの段差をもつ。地下室は奥行4.9m、幅2.6～3.2m、高さ2.5mを測り、平面形は長方形を呈している。出土遺物は、地下室底面より石臼片と古銭が出土している。時期は遺物より中世と考えられる。

一宮町柳田遺跡

柳田遺跡は、一宮町地藏堂字柳田に所在し、蜂城山がゆるやかに山裾をひろげる京戸川右岸の微高地の先端部に占地している。歴史時代（平安時代）の住居址1軒、地下式土壇1基が発見された。地下式土壇は、ロームをL字状に掘り込んだものであり、断面はカマボコ状を呈し、底面は隋円形を呈する。出土遺物はない。時期不明。

甲府市牛石遺跡

牛石遺跡は、甲府市上帯那町牛石128番地に所在し、帯那山南麓の緩斜面に位置する。地下式土壇1基が発見された。地下室の平面形は、隅丸方形を呈し、幅2.6m、奥行3.3mを測る。出土遺物は土師質土器の破片である。時期不明。

武川村上原遺跡

上原遺跡は、北巨摩郡武川村宮脇字上原に所在し、小武川と釜無川との侵蝕によって形成された段丘となり、この段丘上に位置する。地下式土壇は、入口部は円形を呈し、直径68cm、堅壇、深さ1.9mで幅28cmの段がつく。地下室は、奥行3m、幅2m、高さ1.4mを測り、天井はカマボコ形を呈する。堅壇の3カ所に小孔があいている。出土遺物は埋土中より土師器片が出土している。時期不明。

長坂町小和田遺跡

小和田遺跡は、北巨摩郡長坂町大八田5358番地に所在し、中央道西の宮線と鳩川が交差する、大久保の集落と西和田の集落との間に位置している。歴史時代（平安時代）の住居址1軒、掘立柱建物址1棟、石組井戸、薬研堀1本、掘1本、小溝1本、地下式土壇15基が発見された。

地下式土壇は、平面形長方形を呈し、地下室は横に長い。天井部は、カマボコ形を呈する。出土遺物は、3号地下式土壇より、天目茶碗、硯、元祐通寶、石臼が出土した。時期は中世～近世初頭と考えられる。

大泉村御所遺跡

御所遺跡は、北巨摩郡大泉村谷戸字御所に所在し、大泉村役場の南西約1kmにある独立丘陵

上に位置している。縄文時代前期の住居址、集石土壙、土壙とともに地下式土壙1基が発見された。地下式土壙は、竪壙径1.4mを測り、入口部よりロート状に口をすぼめる。地下室は、縦1.6m、横3.4mで、平面形は長方形を呈する。竪壙において9個の孔が検出された。出土遺物は雑器（内耳土器）、灰釉陶器、ひで鉢、五輪塔、茶臼、土師質土器が出土した。地下式土壙の時期は、室町期～江戸初頭と考えられている。

大泉村金生遺跡

金生遺跡は北巨摩郡大泉村谷戸字金生に所在し、標高750m～780mの細長い尾根上に位置している。縄文時代前期、後期、晩期の住居址、配石遺構、歴史時代の住居址、掘立柱建物址、土壙群とともに地下式土壙53基が発見された。

大泉村東姥神B遺跡

東姥神B遺跡は北巨摩郡大泉村西井出字東姥神に所在し、八ヶ岳南麓の緩やかな傾斜をもつ舌状の尾根上に位置している。縄文時代、歴史時代の住居址とともに、掘立柱建物址9棟、土壙63基、地下式土壙3基、溝状遺構2本が発見された。1号地下式土壙は、竪壙径1m×1m、深さ1.2mを測る。地下室は奥行1.9m、幅1.2mで平面形は隅丸方形を呈する。出土遺物はない。時期不明。2号地下式土壙は、竪壙径1m、深さ1.2mを測る。地下室は、1.1m×1.3mで平面形は隅丸方形を呈する。出土遺物はない。時期不明。3号地下式土壙は、竪壙は、深さ1.4mを測り、地下室は1.2m×1.4mで、平面形は隅丸方形を呈する。出土遺物はない。時期不明。

小淵沢町宮原遺跡

宮原遺跡は、北巨摩郡小淵沢町久保字宮原に所在する。掘立柱建物址3棟、土壙5基とともに地下式土壙2基が発見された。1号地下式土壙は、入口部を西側にもち、奥行2.5m、幅2mを測り、平面形は隅丸長方形を呈している。出土遺物は土師質土器、青磁が出土した。地下式土壙の時期は、中世と考えられる。2号地下式土壙は、入口部が円形を呈し、直径1mを測り、深さ1.2m付近で幅50cmの段がつき、段から斜に70cm下って底に達する。地下室は奥行1.5m、幅1.8mで平面形は長方形を呈する。出土遺物は、内耳土器、皇宋通寶1点出土した。地下式土壙の時期は、中世と考えられる。

以上が県内で発見された発掘調査された地下式土壙である。

(1)立地

地下式土壙の立地について、半田堅三氏は、4つの例を上げている。(1)台地上平坦部に構築された例、(2)台地斜面に構築された例、(3)台地上に人為的に造られ窪地に構築された例、(4)城館内に構築された例。4つの例に県内の地下式土壙発見地をあてはめると、(1)台地上平坦部、大月市吉久保遺跡、原平遺跡、一宮町柳田遺跡、武川村上原遺跡、大泉村御所遺跡、(2)台地斜面に構築された例、上野原町牧野遺跡、富士吉田市古屋敷A遺跡、甲府市牛石遺跡、大泉村

東姥神B遺跡、小淵沢町宮原遺跡、(3)台地上に人為的に造られた窪地例、なし、(4)城館址内に構築された例、長坂町小和田遺跡、大泉村金生遺跡、以上立地は、本県の例でも関東地方と同じく地下式土壇は大部分が台地上に立地している。

(2)形態

各遺跡で発見された地下式土壇の大部分の形態は、竪壇と単室の地下室からなるものであるが、竪壇底を地下室底との間に段があるもの、竪壇底と地下室底との間に段がないもの、竪壇壁面に足掛けのピットをもつもの、3類に分類できる。

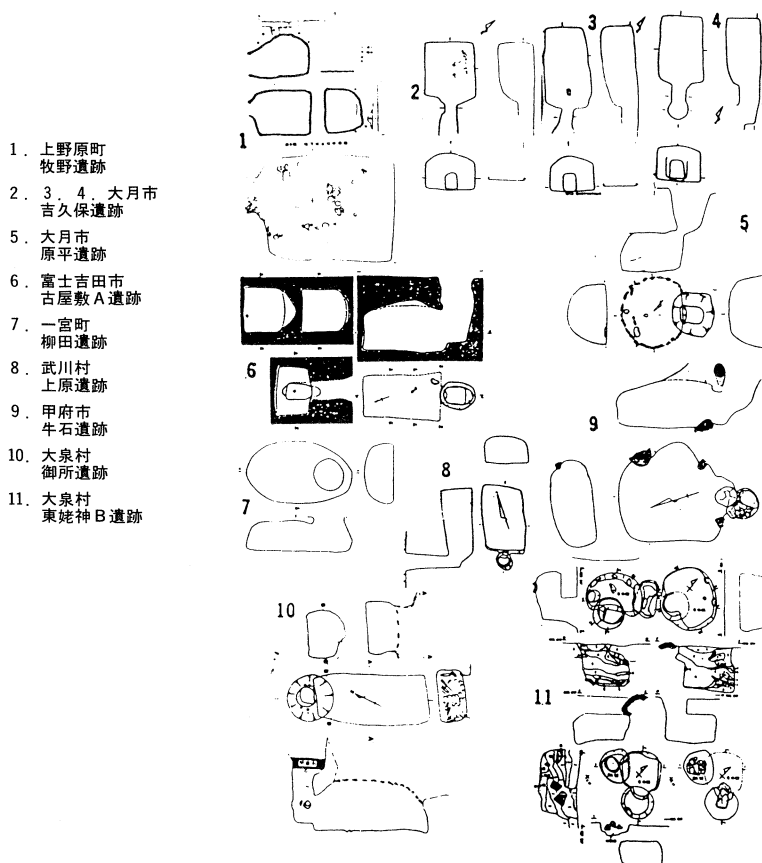
(3)構築時期

遺物がまったく検出されていない地下式土壇もあるが、地下式土壇内からの遺物や他の関係遺構より考えて、中世以降に比定されよう。

(4)機能

機能面についての結論をだすにはいたらないが、大泉村の御所遺跡や金生遺跡のように五輪塔が出土している地下式土壇もあり、墓的性格をもつものがある。

又、形態を見た場合、墓壇よりも貯蔵的なものと考えられるものもある。



第17図 県内の地下式土壇

石臼を出土する土壌について

石臼の破片が土壌内より検出される例は、各地の中世遺跡等で多く報告されている。石臼が破片で検出されるのは、石臼廃棄の際における破壊の習俗である。石臼に対する「魂ぬき」が行なわれたものと考えられ、一種の副葬品と考えられる。県内の例では、高根町旭東久保遺跡、大泉村東姥神B遺跡で報告されている。

遺物について

土師質土器

本遺跡の土師質土器は、皿類で、形態のわかるものは14個体で、その他にも小破片がかなり出土している。形体は皿が主で、いずれも底部に糸切痕を残すロクロ成形のものである。土器の内面、特に口縁部には、タールの付着がみられることから、灯明皿として用いられていたものと考えられる。

内耳土器

本遺跡出土の内耳土器は、ほうろく1点を除き、すべて鍋形で、しかも同一形態を示している。すなわち、口縁部が外反し、屈曲して胴部に続く、そして底部は平底を呈するものである。

おわりに

宮原遺跡は、発掘調査面積が比較的小規模でありましたが、中世の所産である地下式土壌等の検出により、中世頃の本地域における歴史の一端が明らかになったと思われます。今後は周辺部の調査とともに、文献資料など、からめて考究する必要があります。

最後に発掘調査、報告書作成にあたり、関係各位の御協力、御指導に対し、深甚なる感謝の意を表わします。

参 考 文 献

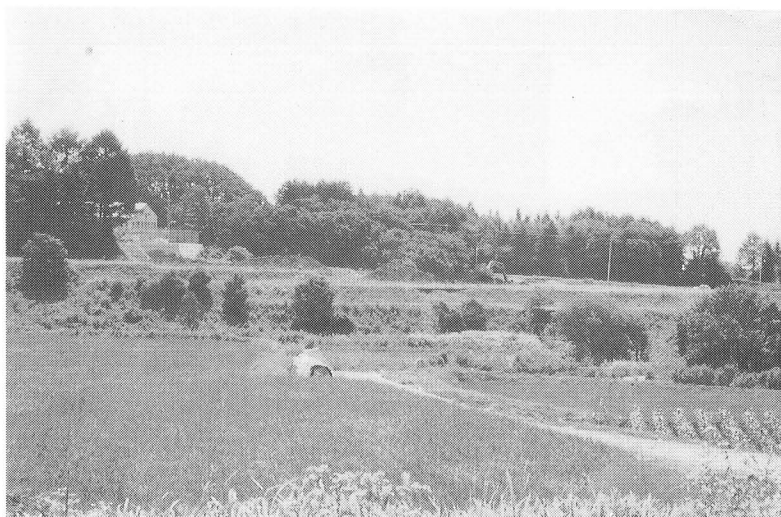
- 岡本範之 1984 『小和田遺跡』長坂町教育委員会
櫛原功一 1985 『東姥神B遺跡』大泉村教育委員会
佐藤 元 1978 『御所遺跡』山梨大学考古学研究会
末木 健 1975 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 大月地内2』山梨県教育委員会
信藤祐仁 1984 「甲府市上帯那町牛石遺跡」『丘陵第10号』 甲斐丘陵考古学研究会
半田堅三 1979 「本邦地下式壙の類型学的研究」『伊知波良2』 伊知波良刊行会
山本寿々雄1974 『方形周溝墓等の調査』山梨県教育委員会
山下孝司 1982 「上原遺跡」『丘陵第9号』 甲斐丘陵考古学研究会
長谷川 孟1977 『牧野遺跡』 上野原町教育委員会
堀内 真 1983 『古屋敷遺跡』 富士吉田市教育委員会

圖

版

図版1

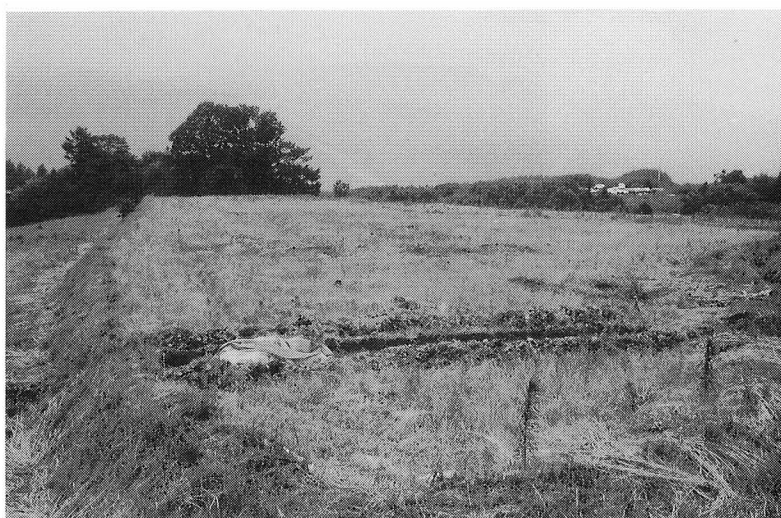
遺跡遠景
(北より)



遺跡遠景
(西より)

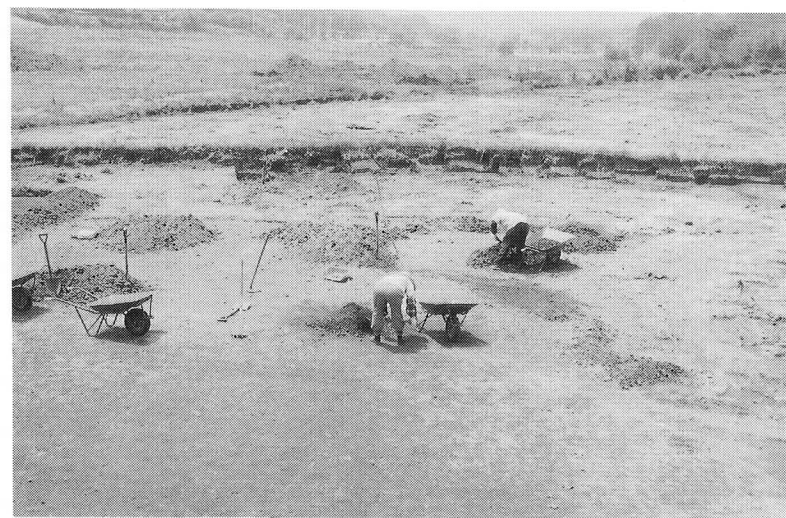


遺跡近景
(北より)



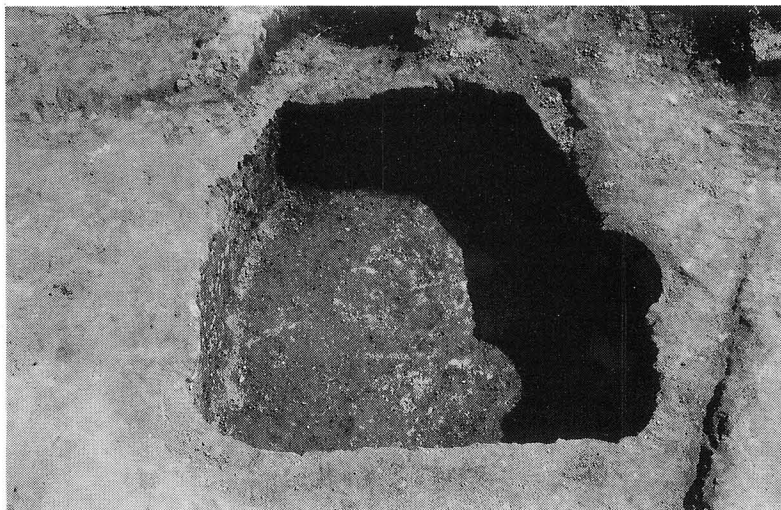
図版 2

発掘風景

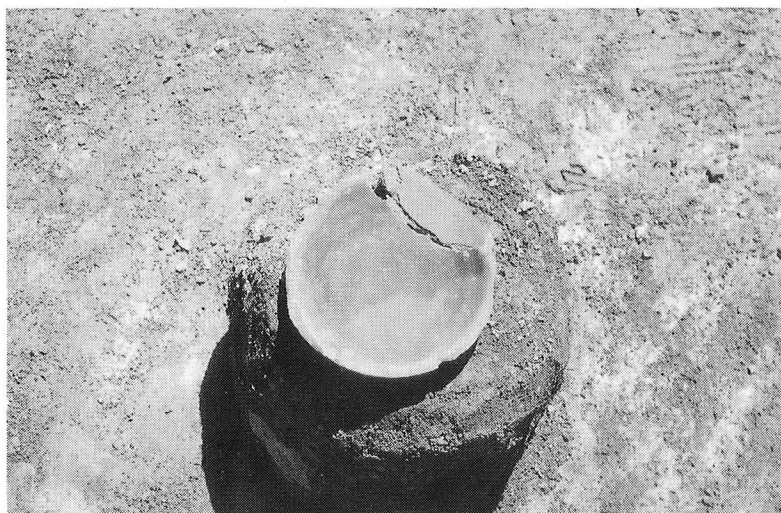


図版 3

第 1 号地下式
土壇



第 1 号地下式
土壇出土遺物

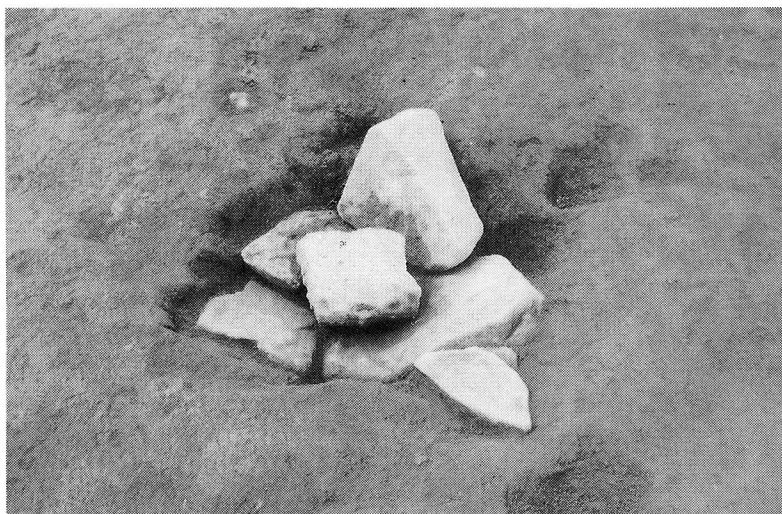


第 2 号地下式
土壇



図版 4

第 1 号土壙

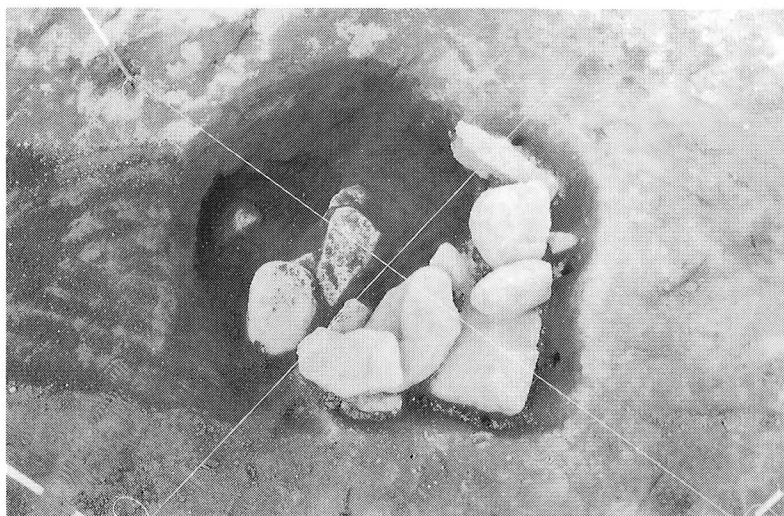


第 1 号土壙
石臼出土状態

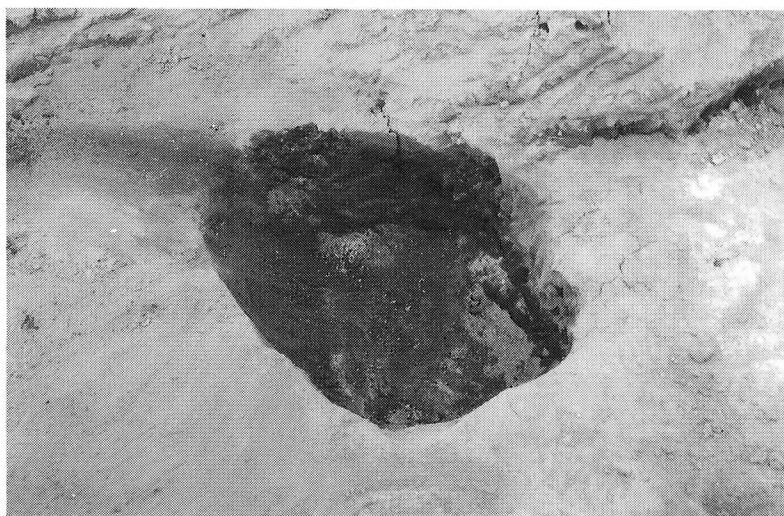


図版 5

第 2 号土坑

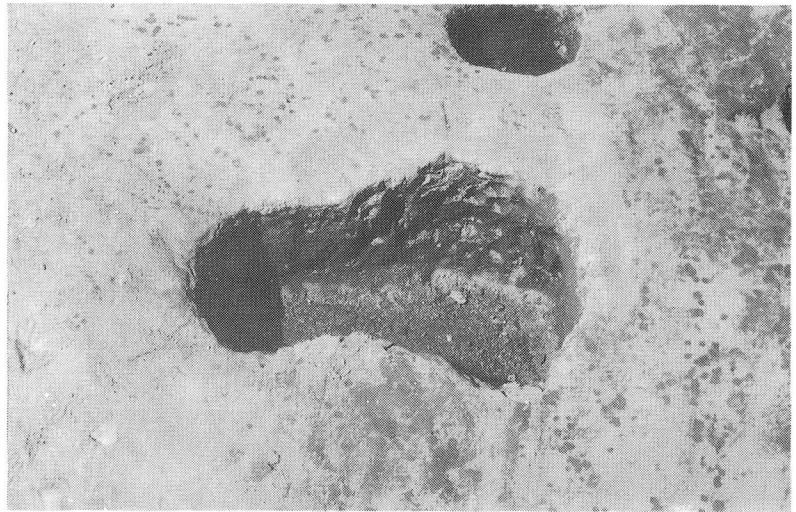


第 2 号土坑

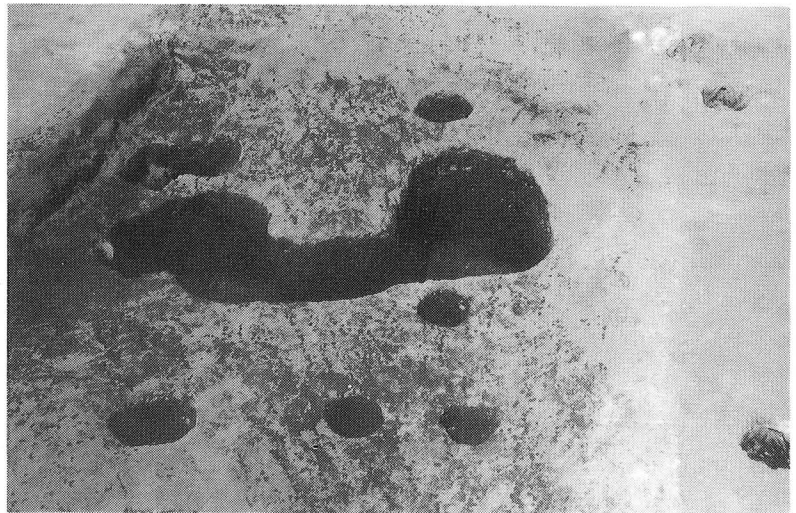


図版 6

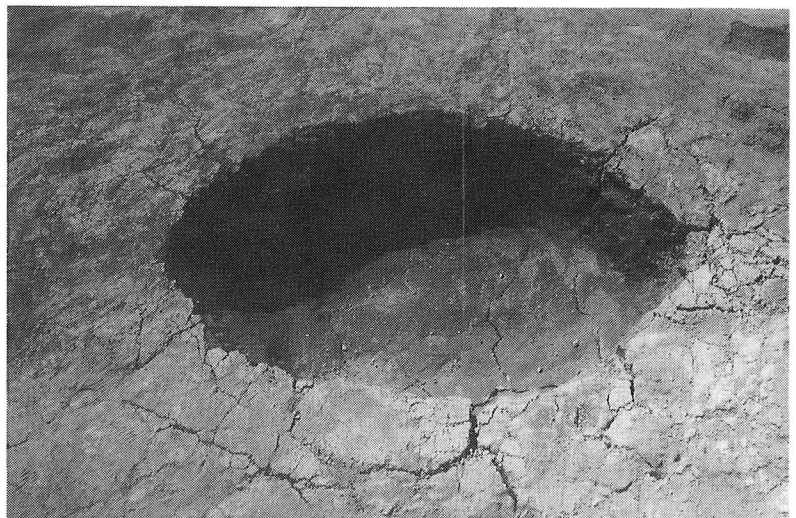
第 3 号土壙



第 4 号土壙



第 5 号土壙

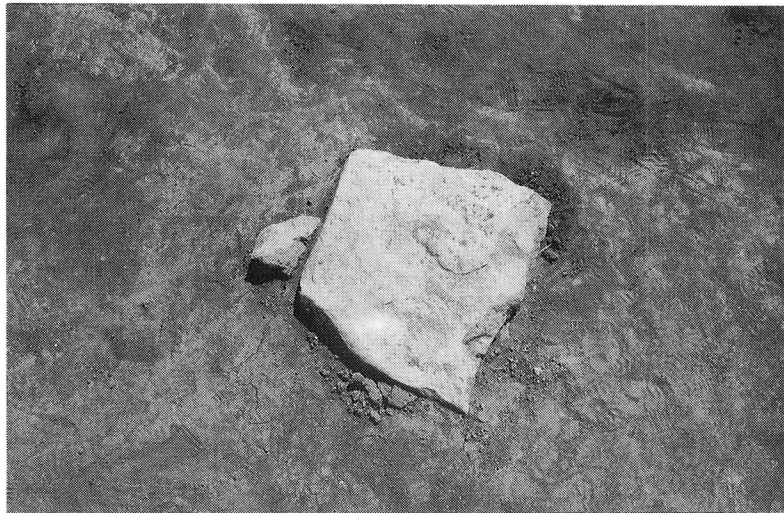


図版 7

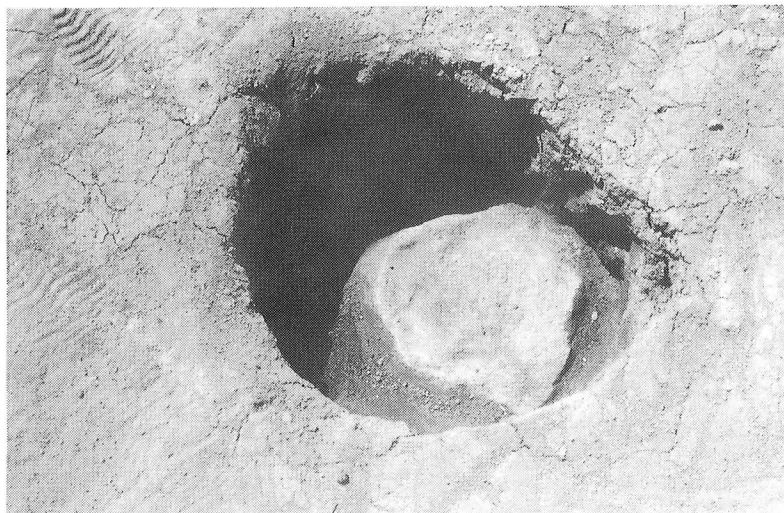
掘立柱建物址



掘立柱建物址
にともなう
礎石

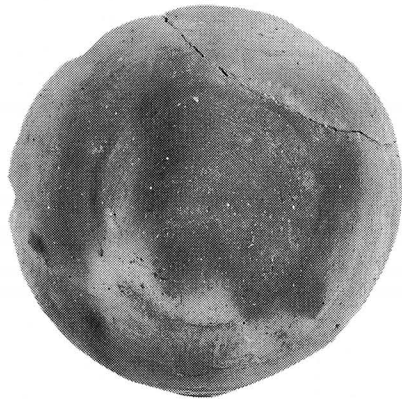
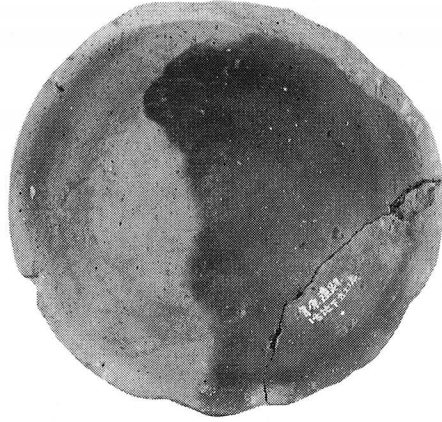


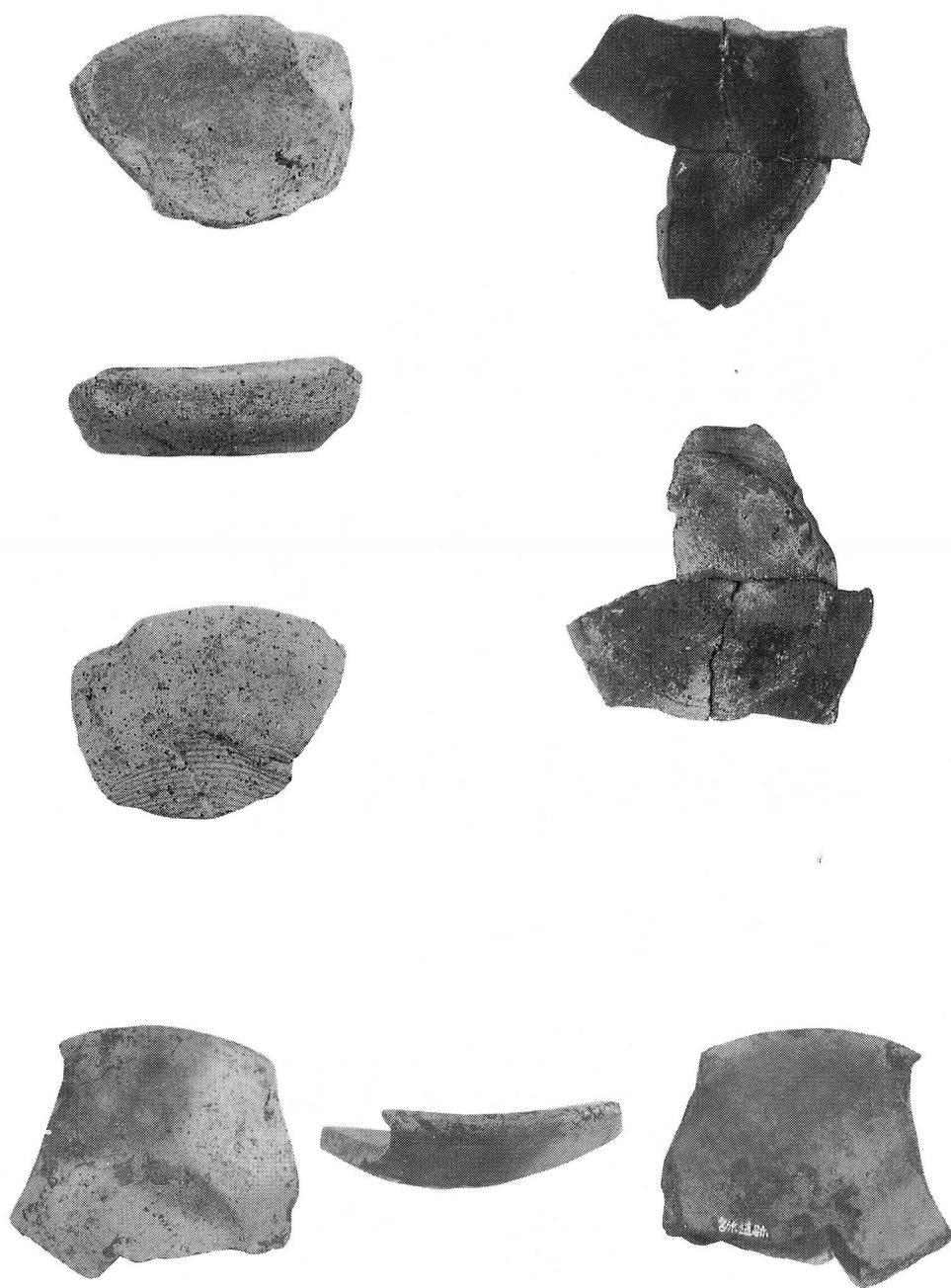
掘立柱建物址
柱穴内礎石



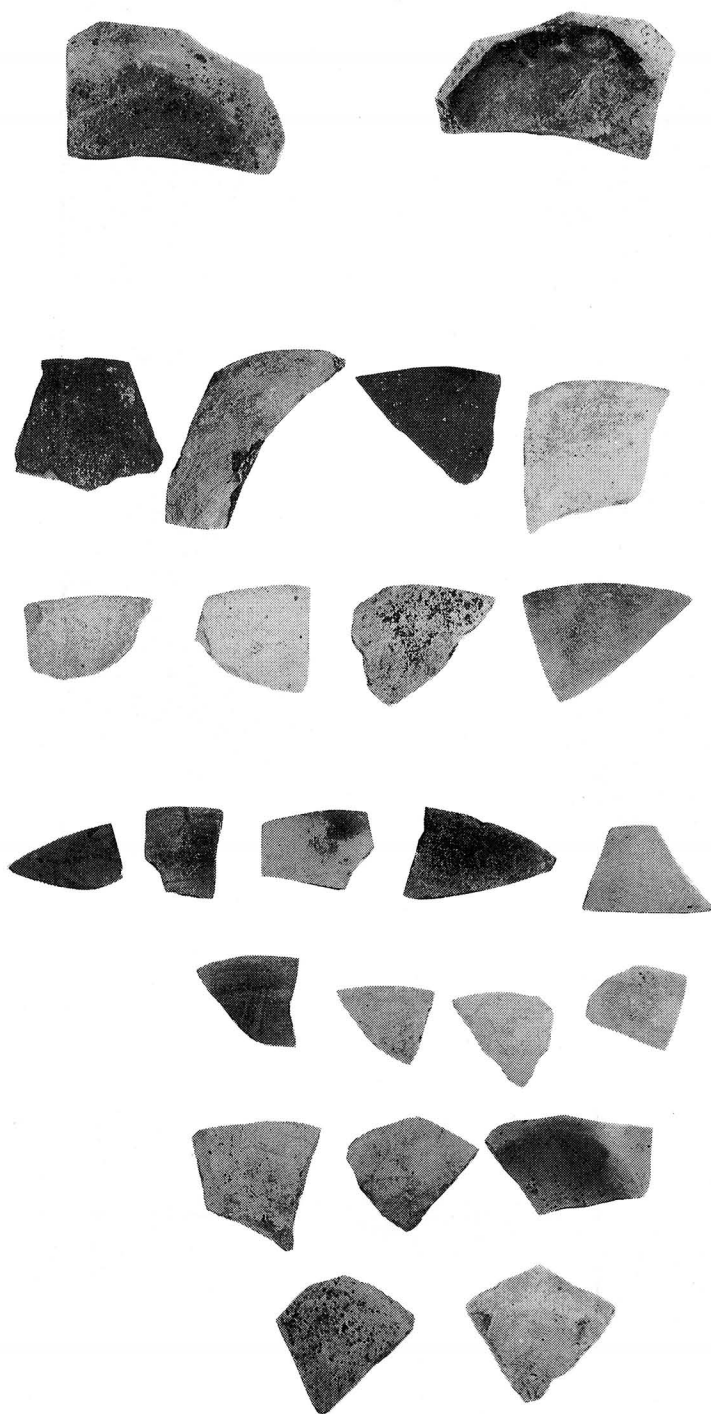
図版 8

土師質土器





土師質土器

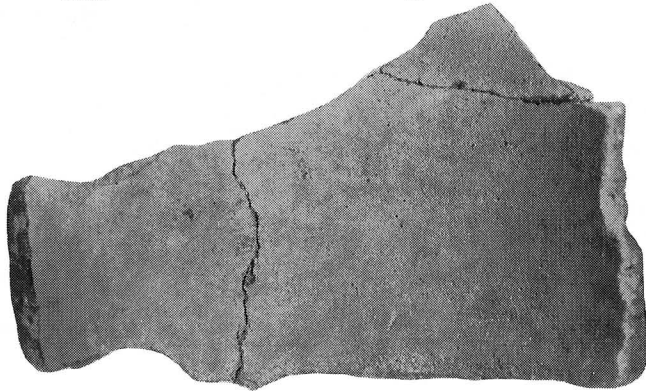
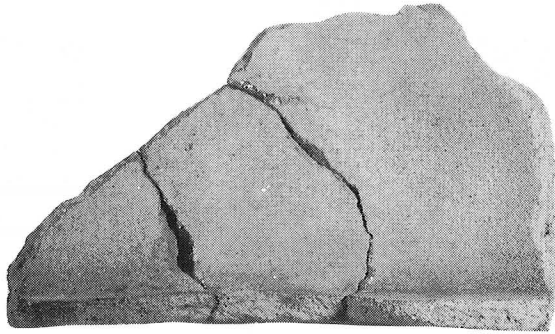
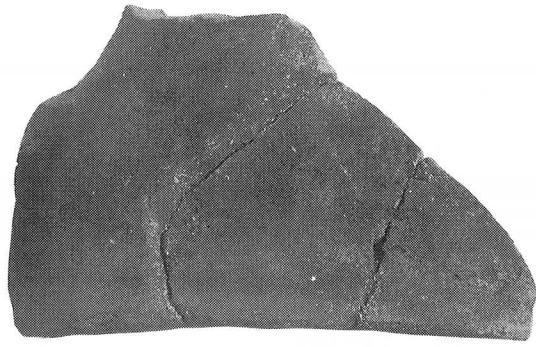


土師質土器



内耳土器

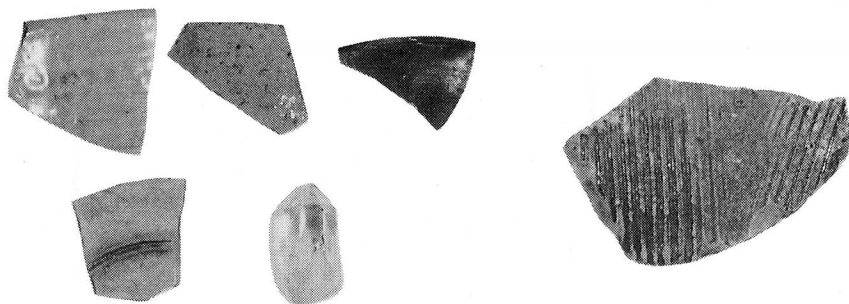
图版12



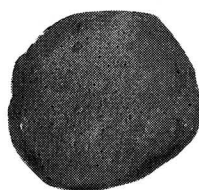
内耳土器



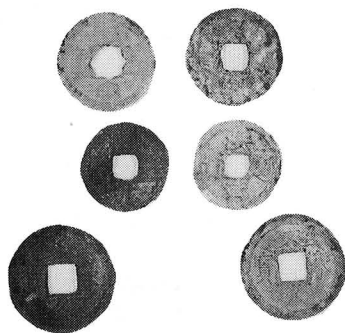
陶磁器



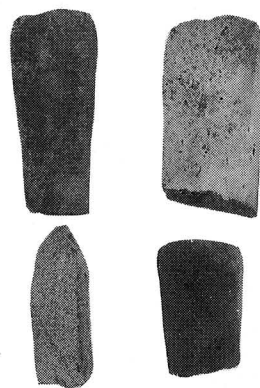
陶磁器



土製品



古銭



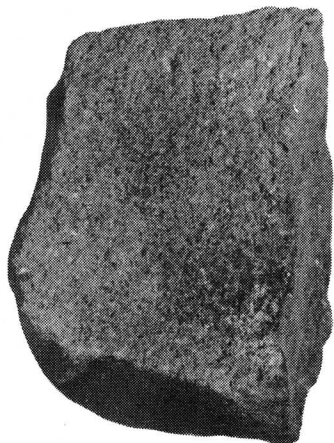
砥石



石臼

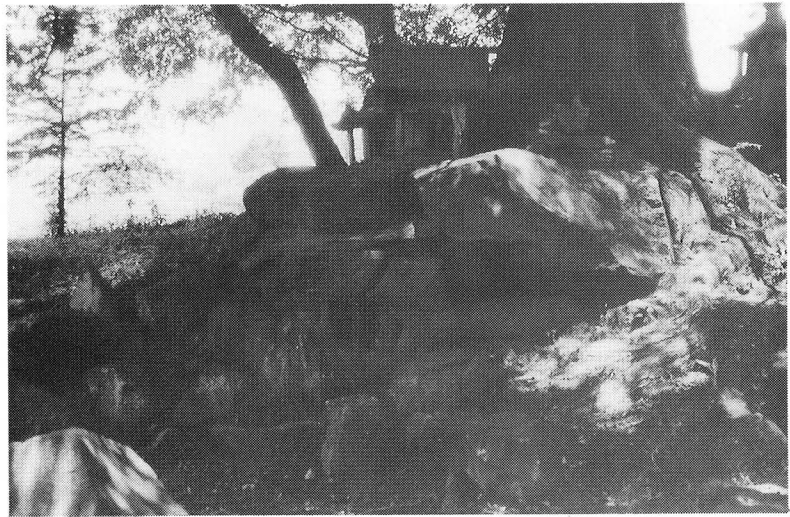
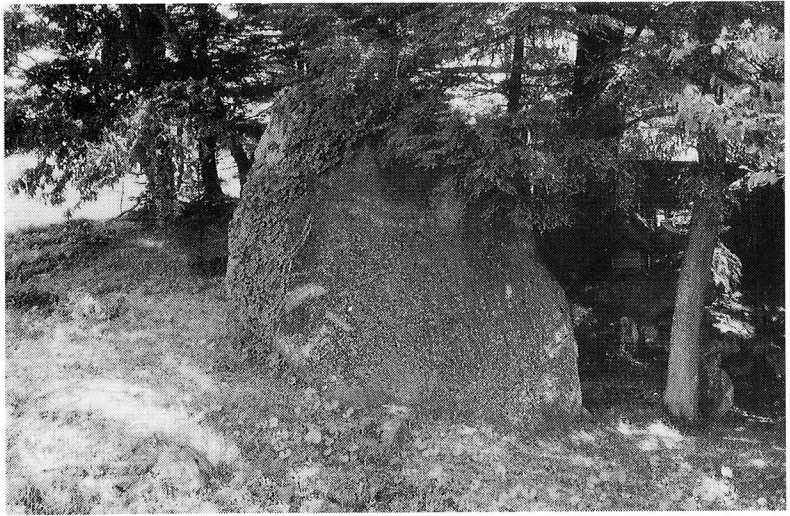


石鉢



図版16

宮原遺跡北側
石宮神社



発掘調査
参加者

小淵沢町埋蔵文化財調査報告第4集

宮原遺跡

昭和61年3月31日発行

編集・発行 小淵沢町教育委員会
〒409-16
山梨県北巨摩郡小淵沢町835
TEL 0551(36)2111

印刷 峡北印刷株式会社
〒408
山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条
TEL 0551(32)3245

